

論文の和文要旨

氏名 _____ 長谷川 恒平 _____

(修士論文の題目)

レスリング競技における敗因分析に関する研究

(修士論文の要旨)

I. 緒言

レスリング競技はコンタクトスポーツであり、多くの技 (technique skill) を有する競技である。また階級別競技であるため、「減量」を必要とする場合があるという特異的な特徴を持っている。スポーツ行動の結果をどのように認知し原因づけるかは競技スポーツにおいて、その後の行動・意欲に大きな影響を与えることが報告され、競技力向上のためには、練習・試合での「失敗」、「不満」といった問題点を的確に把握し、分析することにより、試合の問題点 (以下を敗因) をその後の練習で改善・克服することが出来ると考える。敗因を客観的に分析し、課題を明確にすることが競技力の向上につながると考え、敗因について検討を行う必要があると考えられる。

そのため本研究では①レスリング競技用の敗因診断表を作成し、②レスリング競技における敗因を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象者

全日本学生レスリング連盟に所属する大学レスリング部員および実業団に所属している 211 名を分析対象とした。

2. 調査内容

1) フェイスシート

競技レベル、競技年数、階級、スタイル

2) 特性的敗因および状态的敗因

3) 試合後の練習内容の変化

Ⅲ. 結果および考察

1. 敗因を分析する尺度の因子分析

レスリング競技における敗因診断表の因子構造を検討したところ、特性的敗因および状态的敗因ともに「体力」、「精神」、「コンディショニング」、「技術・戦術」の4因子が抽出された。敗因診断表の信頼性を再テスト法によってみたところ、特性的敗因より状态的敗因において高い安定性がみられたため、分析は状态的敗因を用いて分析した。因子ごとの相関係数は.62～.72、 α 係数による内的整合性は.74～.88の範囲であり、診断表の信頼性は比較的高いと判断された（表1）。

	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
体力(5) $\alpha = .876$						
14	上半身の筋力が不足していた	.859	-.007	-.062	.001	.735
16	パワーが不足していた	.803	.032	-.096	-.094	.620
31	体幹(腹筋や背筋)の筋力が不足していた	.771	.055	.019	.024	.634
29	瞬発力が不足していた	.738	-.101	.096	.189	.643
10	下半身の筋力が不足していた	.660	-.005	.076	-.073	.418
精神(6) $\alpha = .821$						
19	対戦相手に恐怖感を抱(いだ)いてしまった	-.008	.819	.001	-.171	.580
20	プレッシャーに負けてしまった	-.017	.759	.131	-.023	.607
12	負けるのではないかと思った	-.003	.702	-.028	-.033	.468
6	緊張してしまった	.008	.698	-.006	.029	.506
24	あせってしまった	.005	.460	-.151	.205	.326
1	勝ち負けを意識しすぎた	.007	.442	.015	.230	.340
コンディショニング(7) $\alpha = .788$						
13	体調が悪かった	-.039	.018	.659	.010	.438
28	ケガをして負けてしまった	.020	-.053	.646	-.012	.408
12	ケガのケアが十分ではなかった	.046	-.060	.627	-.030	.384
27	やる気がでなかった	.166	.052	.604	-.107	.400
7	睡眠不足だった	-.109	-.003	.596	.105	.284
8	セコンドとの意見が合わなかった	-.056	-.039	.593	.044	.379
9	誤審があった	.007	.202	.440	.053	.351
技術・戦術(5) $\alpha = .737$						
4	技をかけるタイミングをのがした	-.025	-.054	-.018	.774	.554
17	技の仕掛けを失敗してしまった	-.075	-.069	.031	.618	.334
3	試合時間をうまく使うことができなかった	-.029	.063	.115	.607	.426
22	試合運びがうまくできなかった	.076	.158	-.155	.521	.396
11	中途半端に技を掛けてしまった	.121	-.038	.046	.418	.214

表1 状态的敗因の項目と因子分析結果

2. 競技力別および競技年数別にみた敗因の違い

競技力別に各因子の平均得点を比較したところ、精神、技術・戦術因子において有意な差がみられた（図 1）。技術・戦術因子において、レスリング競技では力動的相互作用のための対人的技能の高さが要求されるため、競技レベルが低い段階では試合運びや技の仕掛けという力動的相互作用の技能が未熟であることから、高い得点を示したと考えられる。

また、競技年数別にみた敗因では体力および技術・戦術因子において短群で高い得点を示した。技に関して優れている熟練者の方がやや劣る準熟練者よりも「よく考えられた練習」がなされ、競技年数が短いほど相手の動きが予測できず、無駄な動きが増え、競技年数が長くなるにつれ、レスリングにおける体力がつくと考えられるため、低群では2つの因子において高い得点を示したと考えられる。

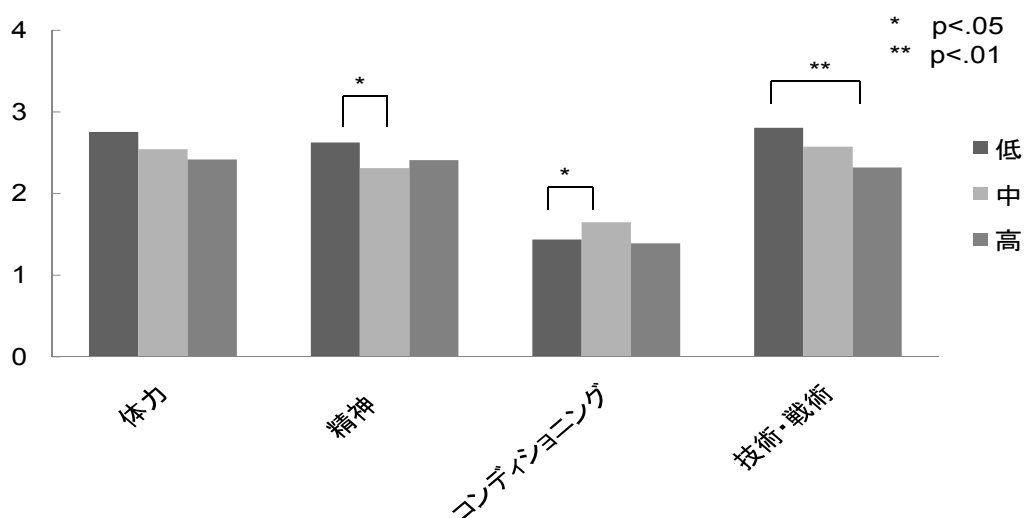


図1 競技レベル別にみた因子得点の比較

3. 階級別およびスタイル別にみた因子得点の違い

階級による因子得点の比較では有意な差はみられなかった。レスリング競技は、柔道の柔道着や相撲のマワシなどのような着衣を含む外的因子がないことから、技術だけでなく身体的能力が競技力に

において大きく左右すると考えられる。しかしレスリング競技は階級別競技であり、同じ体重・体格で行われるため、階級による差がみられなかったと考えられる。

スタイル別における因子得点の比較では、両スタイルの練習時間やレスリング動作などに共通点が多いため、スタイルによる相違はなかった。

4. 競技レベルと変化した練習内容の関係

競技レベルの高い群では、低群および中群と比べ、有意な差はみられなかったが、試合後に練習が変化している傾向が見られた。これは技能の熟達のために明確な目的意識に基づいた「よく考えられた練習」、つまり柔軟で応用力のある自律的・内省的練習をしていることが示唆された。

また、変化した練習内容について（図2）、有意な差はみられなかったが、高群では体力面において変化した傾向がみられた。これは高群（国際大会出場レベル）では体力的に差がある海外の選手と試合を行うことが一要因であると考えられる。

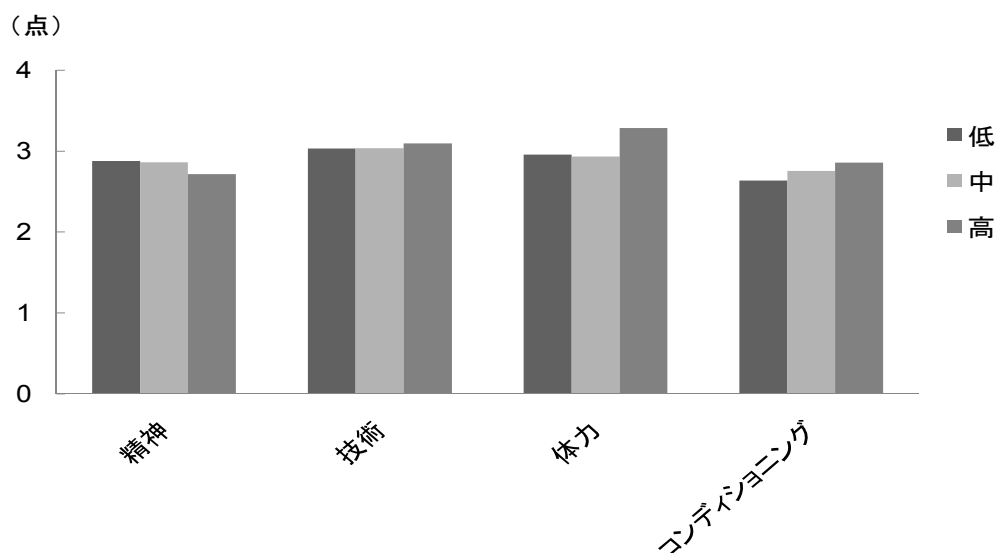


図2 競技レベル別にみた練習内容の変化

IV. まとめ

本研究では、競技レベルが精神、コンディショニング、技術・戦術の敗因に影響を与えていることが明らかとなった。試合に負けた後の練習の変化においても、自律的・内省的練習は競技レベルが高い群において行われている傾向があることが示唆された。

V. 参考・引用文献

- 1) 市原勝彦・奥本正・得本啓次・新畑茂充(2002)生理的および心理的指標からみた大学レスリング選手のコンディショニング. 東亜大学 総合人間・文化学部 総合人間科学 2-1 : 71-82.
- 2) 出村慎一・郷司文男(1994)ソフトテニスの勝敗に対する原因帰属の性、ポジション、競技年数及び競技能力の差異について. 体育学研究 38 : 469-485.
- 3) 大浦容子・後藤克彦(1994)技の熟達と認知的所産-剣道の場合. 教育心理学研究 42-1 : 1-10.
- 4) 佐藤満・久木留毅・飯田義明・前田明・大田暁美・船渡和男(2004)レスリングジュニアトップ選手の形態・体力に関する基礎資料. 専修大学体育研究所紀要 27 : 17-29.
- 5) 滝山将剛・朝倉利夫(2002)レスリング競技の競技力向上に関する研究 (第 1 報) 体力と競技力の関係について. 国士舘大学体育研究所報 21 : 49-60.
- 6) 岩井一師・中里浩一・入江一憲・安達巧・中嶋寛之(2003)腰痛を有する大学レスリング選手の心理的特徴—心理的コンディションインベントリーにおける検討—. 体育科学 52 : 179-188.